

第2回

朝鮮人強制動員被害のはなし

2人の金さんの記憶

太平洋戦争前の戦前から戦後にかけて、忠別川流域の東川町内であったといわれる朝鮮人強制労働の実態解明調査を行っている「江卸発電所・忠別川遊水池・朝鮮人強制連行・動員の歴史を掘る会」（近藤伸生代表）は、昨年3月と10月に韓国を訪れ、町内で労働していたというお年寄りを訪ねて当時の様子を聞き取り調査しました。町内の労働実態は果たしてどのようなものだったのか。同会の近藤代表がこれまでの調査経過を報告します。



昨年3月、韓国政府真相糾明委員会のお二方を訪れ、慶尚北道安東にお住いいただいた。旧江卸発電所で働いた方たちだ。少々緊張してうかがったのだが、お二人とも私たちを歓迎してくれ、快く話をしてくださった。その要約を紹介したい。

金庚述(キム・ギョンスル)さんの話

一九二二(昭和10)年生まれ。日本に行つて五年後に戻つた。

解放(終戦)になり戻つてきた。募集で行つた。会社募集で行けば自由に出入りでき、日当五千ウォンずつもらえるということだったが、私たちは組募集で行き、日当二千ウォンだった。

日当から食費として千ウォン引かれる。日本の人たちが連れにきた。食堂



ンネルのように長かった。

タコ部屋は、犯罪者たちを働かせるところより、もっとひどく働かせるところだ。私はタコ部屋にいた。仕事でこき使うこと、お金を少ししかくれないことから、タコ部屋と呼んでいる。自由はない。ご飯食べる時は挨拶

(あいさつ)して立って食べる。昼食は筒ご飯を現場に持ってきて分けて食べた。私は食い意地が張つていなかったが、他の人の中にはお腹がすいて生のジャガイモを盗んで布団の中で食べる人もいた。二年か三年期限ということで行つたのに、期限通りに戻らせないで延期をさせた。一日に十一時間ほど仕事をさせた。交代で仕事をやる。飯場で病んで死んだ人が、各飯場に一人ずつはいたと思う。逃げる人もたま

にいたが、道が一つしかなかったし、途中で取り締まりがあつて、捕えられれば死ぬほどの目にあう。病院は旭川にある病院だった。死ねば火葬をした。

金惟攝(キム・ユソプ)さんの話

一九二二(昭和11)年生まれ。日本人二人がきて募集をしたし、洞長(区長)も行くといふので、自分が二十一歳の時、田植えのころに日本に行くことになった。

行く時は何も知らずに、金を儲(もう)けられると聞いて行つた。どこへ行くのか知らせてくれなかったし、お金をいくらくれるという話もなかった。北海道までは船を二回乗つて、行くのに十二日がか



かった。到着するまでとても苦労して、立っているのが大変だった。北海道に到着して、皆が離れ離れになつ

た。私は水力発電所に行つたが、炭鉱に行つた人も多かった。水力発電所近所に火山があつた。火山で煙が出るのを見たことがある。

すでにトンネルがたくさん掘られていた。私はトンネルを掘り、土砂を運び出した。二人一緒に砂利を運んだ。三交代で仕事をした。日当が二円五十銭と言つたが、正しく払われない。お金は一カ月にまとめて、多分管理者らのご飯代金のようなもので踏み倒すようなことをした。お小遣を一カ月に五十銭ぐらいくれる時もあった。

四馬場ほど下がつたところに中国人が住んでいた飯場があつた。日本人に、殴られて死んだ人もいた。冬に雪がとてもしっかり降るから雪に埋もれて死んだ人もいる。その人は春に雪が解けた時に発見された。(終戦後)解放されて韓国の人々同士、争いが始まつたりもした。棒頭も逃げた。慶州出身の隊長、安東から一緒に行つた隊長も逃げた。

江卸発電所・忠別川遊水池・朝鮮人強制連行・動員の歴史を掘る会

代表 近藤伸生